

港川人の DNA 解析関連の記事をまとめました。

- 1) 読売新聞オンライン記事
- 2) 朝日新聞オンライン記事
- 3) 朝日新聞紙面の複写

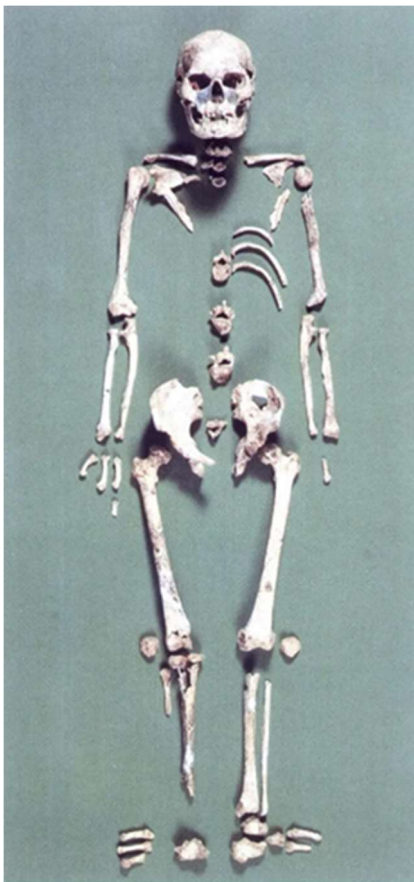
 **読売新聞** オンライン

1) 2021/06/14 14:28 「港川人」、現代日本人と直接つながらず

<https://www.yomiuri.co.jp/culture/20210613-OYT1T50142/>

旧石器時代の「港川人」、現代日本人と直接つながらず…DNA分析「ルーツ論争」に一石

- ・ 縄本島で出土した旧石器時代の人骨、港川人(約2万2000年前)がDNA分析の結果、遺伝的に縄文人や現代日本人の直接の祖先ではないことがわかった。
- ・ 東邦大の水野文月助教(古代ゲノム学)は、「港川人と縄文人は共通の祖先から枝分かれし、港川人の方は直系の子孫を残せず途絶えたとみられる」と分析している。
- ・ 国立科学博物館の篠田謙一館長(分子人類学)の話「ミトコンドリアDNAは母方の情報しか分からないという制限があるものの、系統で見れば、港川人の子孫は現代日本列島人には見当たらず、祖先ではないという結論になる」



港川人の全身骨格 (国立科学博物館提供)

・ 港川人とは

- 1970年に沖縄県八重瀬町で出土した男性1人、女性3人の人骨。日本列島本土では確認されていない旧石器時代の全身骨格で、縄文人の先祖にあたるか否かの論争が続いてきた。



2) 朝日新聞デジタル 2021/7/23

「ご先祖は、2万年前の港川人？ DNA解析、日本人につながる可能性」

https://www.asahi.com/articles/DA3S14985445.html?iref=pc_photo_gallery_bottom

- ・ 沖縄県で約2万年前の全身骨格が見つかった港川(みなとがわ)人=キーワード=は、現代の日本人につながる祖先だったかも知れない。そんな可能性がDNA解析からわかった。

- ・ 総合研究大学院大や東邦大などの研究チームは、解析が比較的やりやすい細胞の小器官ミトコンドリアのDNAを用いる手法を採用。保存状態がよく全身骨格が残る港川人1号の右大腿(だいたい)骨からDNAを抽出し、初めて分析に成功した。

- ・ ミトコンドリアDNAは母から子に受け継がれる特徴があり、その際に起きる突然変異によって親子でもわずかな違いがまれに生じる。DNAに残るこの痕跡を比較すれば、その個体や集団の系統をさかのぼれる。

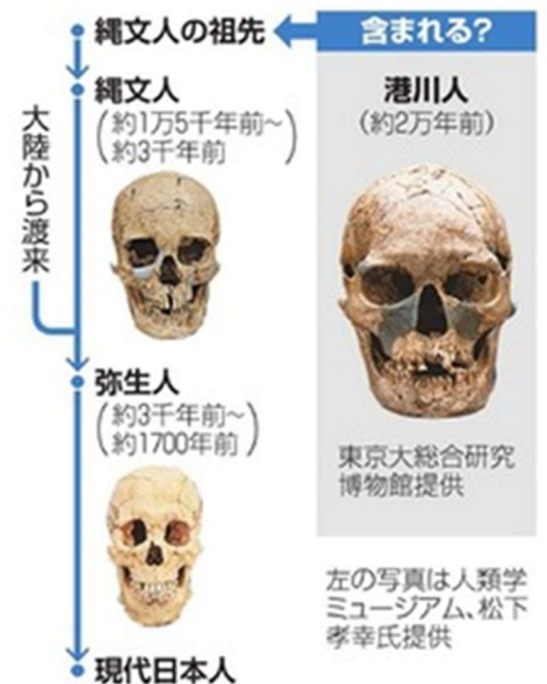
- ・ 分析の結果、港川人1号は、現代の日本人や縄文人、弥生人に共通して多く見られるタイプの遺伝子の祖先型の特徴を持つことがわかった。港川人の子孫の系統が途切れることなく、現代に続いている可能性を示唆するものだ。

- ・ 一方、分析した現代の日本人約2千人の中に、港川人1号と同じ遺伝子の特徴を受け継ぐ直系の子孫はいなかった。

- ・ チームの五條堀淳・総研大講師(自然人類学)は「日本列島のヒトの集団は、旧石器時代から現代に至るまで、遺伝的につながっていきそうだと話す。



港川人は私たちの祖先か？



読む | 教える | 広げる | 探究 |

ご先祖は 2万年前の港川人？

DNA解析 日本人につながる可能性

沖縄県で約2万年前の全身骨格が見つかった。港川人Ⅱは、現代の日本人につながる祖先だったかも知れない。そんな可能性がDNA解析からわかった。日本人のルーツは、土着の縄文人と大陸からの渡来人による「混血説」が定説だが、さらに古くまでさかのぼる可能性が出てきた。



日本人の起源は、約1万5千年前から約3千年前にかけて北海道から沖縄まで広く分布していた縄文人と、その後大陸からやってきた渡来人が混血した弥生人にさかのぼることが、DNA解析などから裏付けられてきた。



ミトコンドリアDNAは母から子に受け継がれる特徴があり、その際に起きる



一方、縄文人より古くからいた港川人との関係ははっきりしてはいなかった。というも、出土した人骨や遺跡だけでは、港川人が別の土地へ移ったり、途絶えたりした可能性もあり、直接の祖先とは限らないから



一方、分析した現代の日本人約2千人の中に、港川人Ⅰ号と同じ遺伝子の特徴を受け継ぐ直系の子孫はいなかった。



港川人Ⅰ号は身長153センチで、成人男性と見られる。頭骨の分析から、こめかみの筋肉が発達し、下あごの骨も頑丈だったことがわかってい



頭骨からわかるのは、こついな形やみげの出っ張りなど深い彫りを持つ特徴が、約2万年前にアフリカで生まれたホモ・サピエンス(新人)の古い姿を残している点だ。豪州の先住

大などの研究チームは、解析が比較的やりやすい細胞の小器官ミトコンドリアのDNAを用いる手法を採用。保存状態がよく全身骨格が残る港川人Ⅰ号の右大腿骨からDNAを抽出し、初めて分析に成功した。

分析の結果、港川人Ⅰ号は、現代の日本人や縄文人、弥生人に共通して多く見られるタイプの遺伝子の祖先型の特徴を持つことがわかった。港川人の子孫の系統が途切れていることなく、現代に続いている可能性を示唆するものだ。

チームの五條堀淳・総研大講師(自然人類学)は「日本列島のヒトの集団を比較すれば、その個体や集団の系統をさかのぼれる。DNAに残るこの痕跡は、旧石器時代から現代に至るまで、遺伝的につながっている」と話す。研究が進めば、現代日本人の中から港川人の直系の子孫が見つかる可能性もあるという。

近頃の別の洞窟からは、2万3千年前の巻貝で作った世界最古の釣り針や、カニの爪、ウナギの骨などが見つかった。

馬場さんは「約4万年前国立科学博物館の馬場悠男・名誉研究員(人類形態学)は「ネズミや魚は骨がついたまま、木の根などの硬いものもバリバリとそのまま食べた。料理は欠である程度だった」とみ

民や、インドネシアで発見され、頭骨に原始的な特徴を持つジャコウネコともよく似ているという。馬場さんは「約4万年前国立科学博物館の馬場悠男・名誉研究員(人類形態学)は「ネズミや魚は骨がついたまま、木の根などの硬いものもバリバリとそのまま食べた。料理は欠である程度だった」とみ



港川人の全身骨格のレプリカ。国立科学博物館提供



港川人の顔の復元図。国立科学博物館提供、山本隆也氏作画



港川人
1970年、沖縄県八重瀬町のフィッシャーと呼ばれる岩の割れ目から、約2万年前の旧石器時代の男女4人の全身骨格が見つかった。発掘場所の地名から港川人と呼ばれる。小柄で華奢な上半身に対し、頑丈な骨格の足腰やあごを持っていた。平地が少なく起伏の激しい島内を集団で放浪しながら、採集狩猟生活をしていたとみられる。旧石器時代の全身骨格が日本で見つかるのは極めて珍しい。発見者の那覇市の実業家、故・大山盛保さんは、人骨発見の3年前に現地でイノシシの骨を見つけた。それ以来、「追ってきた人間の骨もあるはず」と発掘を続けていたという。



発掘調査が進む港川フィッシャー遺跡(1968年12月)。港川人の全身骨格は70年、中央の割れ目(フィッシャー)の中から見つかった=馬場悠男さん提供